



## 佐山美智恵さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：1月31日

### 震災前と体験した後とは、 考え方も変わったような気がします

まもなく3年目を迎える福島市笹谷東部仮設住宅での避難生活を、努めて明るく過ごそうとされている美智恵さん。隣に住む義父母のお世話をしながら、1年近くパソコン教室に通ったり、浪江では仕事のために見られなかった韓流ドラマを楽しんだりされているそうです。今は離れ離れでも、家族みんなが一カ所で心安らかに暮らせる日が早く来ることを祈らずにはいません。



▲「折々に撮っていた家族写真は全て失いました。昨年11月、甥の結婚式の時に、震災後初めてみんなで撮りました。」と話す美智恵さん

■義父母、長男、次男、そして私たちが夫婦、みんなバラバラの避難でした。大震災が起きた3月11日は夜勤明けのため、自宅2階で休んでいました。階下にいた夫の両親も無事で、耐震住宅として建てた我が家は少し被害もなく、テレビが壊れたくらいでした。夫と長男は外出中で、普段から地震がとても怖い私は、家族の心配をしながらも恐ろしくて仕方ありませんでした。中学校の卒業式後に義弟家族が立ち寄ってくれ、一緒に佐屋前の家に移りました。たぶん請戸のどのお宅よりも避難は早かったと思います。

向かいました。しかし、高齢の義父にはトイレがとても不自由だったので、栃木に避難する義弟家族に託しました。次の避難所となった二本松の杉田体育館には私たち夫婦といと夫婦、元同僚の家族、長男はいわき市四倉の私の実家と、家族バラバラに移動しました。避難所では、7日目頃に岳温泉で入浴ができ、その後も何度か連れて行って頂き、本当に有り難かったです。二本松市の方々からは布団や洋服の差し入れや炊き出しをして頂き大変助かりました。私たちが当番を決め、トイレ掃除や炊事をしたんです。

3月末頃からの二次避難は野地温泉でした。長男も合流して親子3人で過ごした後、私たちが

夫婦はこの笹谷東部に入居しました。義父母を呼び戻す際には、役場と相談し隣同士にして頂きました。周りにも親戚や以前近所だったお宅が数軒あり、安心できる環境です。

■「人間は働く場所と住む場所があれば落ち着く」って新聞にあったけど、ほんとですね。週3回、ディケアセンターに通う両親の世話があるので今は叶わぬことですが、そろそろ仕事をしたいなあとあります。職場だった双葉町のグループホーム「せんだん」は2年前に再開したものの、職員が足りないという聞いています。これからどこに住むかについて我が家ではなかなか決まりません。福島市もいいところなのですが、気候が厳しいので、私は生まれ育ったいわきに住みたいなあと思っています。

近頃、「あと5年後、私は何をしたいんだろう」とよく考えます。自分の好きなこと、できることをして一回しかない人生を楽しみたい、納得したいとつくづく思います。子どもたちにも最近はその話しています。震災や原発事故による避難生活が無かったら、私自身こんな風には思わなかったかもしれませぬ。

# 浪江のこころ通信

・第33号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

### 再取材シリーズ

#### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から2年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第33号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





### 三原 優蔵さん・裕子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：1月31日

#### 様々な人との出会いと支援に感謝しています

3年近く暮らした山形県米沢市から昨年12月に転居し、千葉県柏市で暮らす三原さんご夫妻。今の状況を前向きにとらえ、生活を楽しむ工夫をされています。



▲三原優蔵さん、裕子さんご夫妻

私は、もともと松戸生まれですが、結婚を機に妻の実家のある浪江町に入り、自転車兼玩具店を継ぎました。店舗は新町商店街にあり、店内には玩具の他に、ゲーム機を30台近く置いていましたので、学校帰りの子どもたちの遊び場になっていました。子どもたちは、私のことを「ゆうぞうさん」と名前で呼び慕ってくれ、成人したかつての子どもたちから結婚式の案内が届くこともありました。妻の裕子は、何事にもひたむきに取り組む性格で、趣味で始めたパッチワークやエステをもとに、パッチワーク教室やエステサロンを

震災後、避難所を経て、昨年12月まで山形県米沢市の借り上げ住宅で暮らしていました。



▲お・す・そ・わ・けの柚子

開業していました。震災がなかったら、死ぬまで仕事を続けられたのにと口惜しくなります。今は、2カ月に1回ほど、浪江町に帰りますが、ネズミの糞や死骸で家中が臭くて、掃除をする手も止まってしまいます。店側の片づけは全くしておらず、ショールームが壊れたままになっています。

震災当初は、「どうなるんだろう」という不安ばかりでしたが、「浪江のこころ通信」の取材が縁で交流が始まったNPO法人きらりよしじまネットワークの人たちが、生活面のこと、仕事のことなど様々サポートをしてくれ、ほんとうに有り難かったです。末の息子が大学生で、教育費が必要だったこともあり、私はホームセンターで、妻はスーパーマーケットで働き始めました。二人とも今まで、人の下で働くといったことがなかったのですが、最初はたいへんでしたが、そのうち、子どもたちと同年代の上司の相談相手のようになり、楽しく働くことができました。浪江では家業が忙しく、食事づくりは三原のお母さんが担ってくださっていたので、妻はほとんど台所に立つことがありませんでした。そんな妻が、スーパーマー

ケットで惣菜づくりをし、店舗内で行われたコンテストで賞をもらったのです。震災がもたらした浪江では会えなかった様々な人との出会いと体験がありました。現在住んでいる家は、姉の持家を譲ってもらいました。借家にしていましたが空いたので、昨年の12月14日に越して来ました。雪のある暮らしは辛いといわき市の借り上げ住宅で暮らす三原のお母さんも、車で迎えに行き、柏と一緒に過ごすことが多くなっています。柏に来て1カ月半、「近所付き合いのきつかけになればと、庭の木になった「ゆず」を籠に入れ、「自然の恵みをどう感謝！お・す・そ・わ・け」の案内をつけて、玄関先に置きました。うれしいことに、お礼の言葉といっしょに頂き物をしたり、仕事先の紹介をしてもらったりしています。

震災に遭い、友人のありがたさを実感しました。電話をくれた人、みかんやお米を送ってくれた人、人の温かさに触れることができました。悪いほうにばかり考えると、どんどん気持ち重たくなります。周囲の人からの支援を当たり前と受け止めず、感謝の気持ちを忘れずに暮らしていけたらと思っています。



### 笹木 浩二さん・厚子さん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野サポートセンター 新保  
取材日：2月7日

#### 避難者でなく、“普通の生活”を取り戻したい

現在、笹木さんご夫妻は、新潟県新潟市内で息子さん(次男)と2匹のワンちゃんと一緒に生活しています。現在高校2年生の息子さんが卒業したら、福島県中通りへ移り新生活を始める予定です。



▲一緒に避難してきた2匹のワンちゃんと

ガソリンを求め、たまたま新潟へ避難  
震災発生時、すぐに自宅へ帰れると思っていたので、ペットの道具だけを持って避難しました。なかなかペットと一緒に受け入れてくれる避難所がなく、川俣の道の駅で車中泊ということもありました。  
ほとんどガソリンが減ってしまい不安は募るばかり。知人から「新潟方面に行くと、ガソリンがあるよ!」という情報だけ

息子の高校生活と家族の今後  
浪江町では、2世帯で住んでいました。長男は震災前より関東の大学へ進学していましたが、震災を機にさらに世帯分離という形になってしまいました。現在、こちらでは定着した就職につくことも難しい状態にあり、今後の生活のことは次男の高校卒業後にしっかり考えようという家族で決めました。  
次男も、あのような形でいきなり日常をはぎ取られて、子どもながらに喪失感などもあると

を手掛かりに、新潟方面へ車を走らせました。新潟市に到着したころ、すぐに帰れないかもしれないという状況を把握。  
まずは安心して寝ることができるところを見つけてはほしい、不動産屋さんへ。避難する時は何か追い立てられていて、親戚や知人に頼むということもパツと考えることができなくなりました。初めて入った不動産屋さん、物件だけでなく家具の手配などにも気をかけてくださり、本当によくしてくださるのを見ています。

どこまでもいつまでも、避難者”という立場ではなく、以前のように普通に働き、普通に家族みんなが何気ない日常を過ごせる日が来れば良いと思います。

私自身も新潟市内での生活に少しずつ慣れてきて、同じく新潟市内に避難しているママ友と月1回ランチに出かけたりしています。今年は、例年に比べ雪も少ないようで一安心です。  
雇用やインフラの整備など、浪江町で生活再建をするのはまだまだ多くの課題があります。就職や家庭など様々な事情で帰町できない町民も多いと思います。そのような町民へ、他の地域での定住支援への切り替えも必要になってくるだろうと感じています。